

## 「今を生きる」

(校長便り R2 NO.11)

### 校長式辞（3学期終業式）

本日で3学期が終了し、令和2年度がまもなく終わろうとしています。この一年を振り返ってみてどうでしたか？言うまでもなく、この一年はコロナ禍に翻弄された一年ではありましたが、できなかったことを嘆いたり、悔しんだりするのではなく、ぜひ、この一年で得られたことや学んだこと、自分自身成長できたことに目を向けてください。そうすることで、皆さんがコロナ禍の中で頑張ってきたことが無駄ではなかったことをきっと実感できると思います。

それでは、令和2年度の終わりにあたり、皆さんに一つお話をします。物事を客観的に、冷静に捉えるということについてです。例えば、コロナ禍を例にとってみたときに、私たちは未だに必要以上に恐れたり、あるいはその逆で、自分は大丈夫だろうという根拠のない過信があったりします。しかし、果たして私たちはコロナ禍という、今起きている出来事をどれくらい客観的に、冷静に捉えられているのでしょうか。それを阻害する要因の一つとして、インフォデミックが考えられます。インフォデミック (information+pandemic) とは、ネットなどで噂やデマも含めた大量の情報が氾濫していることを意味します。コロナに限らず情報量が少なかった昔に比べて、現代は飛躍的に情報量が増えています。しかし非常に便利になった反面、様々な情報が氾濫する中で、それに惑わされずにいかに正しい情報を入手し、その情報を基に正しく判断していくか、その能力がまさに今問われています。

卒業式で73期生にも話をしましたが、ライフネット生命創業者で、立命館アジア太平洋大学学長である出口治明さんは、自分の頭で考えるためのヒントとして、「タテ・ヨコ・算数」の3つを挙げています。「タテ」とは時間軸、すなわち昔の歴史、私たちの先人が繰り返してきた試行錯誤から学ぶ、「ヨコ」とは空間軸、すなわち世界の人々の考え方や実践から学ぶということです。この二次元で考えると、物事の実態や本質がより明確に見えてきます。これもコロナ禍に例えると、100年前にスペイン風邪が大流行しました。そのときの状況がどうであったのか、終息に何年かかったか、その前後で世の中がどう変わったかなどを知ることで今の状況を打破するヒントが得られるはずです。また、日本や兵庫県だけに目を向けるのではなく、世界の国々はどう対処しているのか、その効果はどうかを知ることもヒントになり得ます。もう一つ、「算数」とは数字・ファクト・ロジックで考えるということです。数字は客観的なデータ、ファクトは事実、ロジックは論理・理屈です。この三つのうちの一つでも欠けていると、皆さんの主張や意見が曖昧で主観的な感想めいたものになってしまいます。この「数字・ファクト・ロジック」の3つの視点は、実は今皆さんが取り組んでいる探究学習にも大いに通じる場所があります。そして、何より大切なのは「自分の頭で考える」ことであると出口治明さんは説いています。今後、皆さんが生きていく中で、「正解のない問い」に向き合うこともたくさんあると思いますが、根拠もなくいたずらに不安がったり、問いに正対もしていないのに簡単にあきらめてしまうのではなく、冷静に物事を捉え、自分の頭で考え、自分なりの答えを見つけてほしいと思います。

来年度もコロナ禍はまだ続きますが、受け身ではなく、この状況下で自分には何ができるのか、どうできるのかといったことをポジティブにしっかりと考え、自分の意思で実践できる1年としてほしいと思います。

令和3年3月23日

兵庫県立生野高等学校長 福田 孝善